

レポ ー ト



ある労働組合所蔵の労働者教育資料コレクション、1881-1975年

NPO 法人全日本大学開放推進機構 理事長 香川 正弘

1. イギリス労働者教育資料

イギリス大学拡張運動関係の資料は、ケンブリッジ大学図書館及び同アーカイブス、オックスフォードのボドレイ図書館及び大学アーカイブスに集められている。この両大学の図書館以外にも、それぞれの大学の大学拡張部局にも所蔵されているし、地方の公共図書館にも所蔵されている。ケンブリッジの大学拡張運動資料は、1970年3月にチャールズ・エドウィン・ウェルチ博士により棚番号が付けられて整理が完了し、研究者が活用できるようになった。オックスフォードの場合は、戦後すぐにフランク・ジェサップが資料整理に手を染め、本格的には1985年(オックスフォード大学拡張100年目)にアーカイビスト補のルス・F・ヴァイズ女史によってウェルチ博士と同様な作業が行われて原資料が活用できるようになった。1970年代以降の大学拡張運動研究は、これらの原資料に基づいて、多様な視点から運動の本質が解明されるようになった。

我が国のイギリスの大学拡張運動及び成人教育史研究で最も関心を集めてきたのは、チュートリアルクラスを含む労働者教育であると思われる。チュートリアルクラスは大学と労働者教育協会(The Workers' Educational Association)が協同して実施したので、両大学のアーカイブスと労働者教育協会に所蔵されている。労働者教育は労働者教育協会だけでなく、ラスキン・カレッジや全国労働カレッジ(National Council of Labour College)でも全国的に行われていたので、それらの資料もまた研究に活用できる。これらの労働者教育団体の活動は、大学拡張講座や労働者教育協会が主導するチュートリアルクラスを参考にしながら、独自の理念とカリキュラムを構成して労働者に学習プログラムを提供したり、他団体で開かれている学習活動を奨励した。その場合、労働組合団体組織を中心に広報を行った。大学拡張当局や全国的な労働者団体の本部にある資料は、その団体のかかわった活動を中心にした資料が残っているのが特色であるが、受け皿となる労働組合の側には、自分たちが加盟したり支持している団体からの資料など、それぞれの時代の重要な資料がある可能性があると思われる。労働者教育協会等の中央団体だけを見るのではなく、労働組合が自分の組合に属する組合員にどのような教育を提供しようとしていたのかを知ることは、大学拡張運動と労働者のかかわりを考えるのに重要であるに違いない。しかし、労働組合が所蔵する労働者教育関係の資料を調査したものは未だなかったように思う。本稿は、ある労働組合が手放した労働者教育資料を取り上げ、大学拡張運動と労働者教育の研究資料の意味を考察したい。

2. 労働組合所蔵の「成人教育コレクション」の取得

話は45年前に遡る。筆者が「イギリスの大学拡張の初期形態」という修士論文を作ったときに、年表を作成したことがある。イギリス人の書いた著作にひとつの歴史的事実について違った年代が書かれているのを8つ発見した。その一つの例としてオックスフォードが基金立大学拡張講師(Endowed Lecturers)を任命した年について、次のように異なった記述があった。

1877年に任命、T.Kelly, *Outside the Walls*, Manchester, 1950, p. 33n. (原文は次の通り。It is interesting to note the emergence of a class of full-time tutors in adult education. W. Hudson Shaw, who was appointed as an "Endowed Lecturer" under Cambridge in 1877, was the first.)

1886年に任命、T.Kelly, *A History of Adult Education in Great Britain*, Liverpool, 1962, p. 235.

1887年に任命、W.H.Draper, *University Extension*, Cambridge, 1923. p. 39.

この年代の相違を目の前にして、読者はどれを正しいとして引用されるだろうか。基金立大学拡張講師というのは、兼職や契約をして雇用する拡張講師ではなく、専任の大学教授としての拡張講師の始まりを画する出来事であり、ケリー教授も指摘するように専門職としての成人教育チューターの出現であるから、専任の大学拡張部局の事務局長の設置と同様に大学拡張運動(及び成人教育)では重要な発展を記することであった。任命の年が変わると、またその解釈も変わってくるのである。この時、筆者は外国研究といえどもグレイトブックスという専門書に依拠するのではなく、原資料に当たることと、原資料も資料吟味をすることが必要であることを痛感した(ちなみにこの正解は1887年である)。

1971年からケンブリッジ大学図書館と構外教育部の接触が始まり、1972年7月11日付けの書簡で、同構外教育部事務局長のJ.M.アンドルー氏の紹介でウェルチ博士を紹介され、以後、アーカイブスのリーダーダム・グリーン博士等と連絡を取り、ケンブリッジ大学拡張資料のうち重要な原資料は取得することができた。資料提供を求めるこちらの要求に対しケンブリッジの図書館が出した条件は、「あなたの自己負担で、ケンブリッジ図書館にもうひとつ同じマイクロフィルムを作ることを認めること」というものであった。今、ケンブリッジにある大学拡張資料のマイクロフィルムは筆者の経費負担で寄付したことになる。オックスフォード大学の図書館との接触は1977年11月頃から始まった。ボドレイ図書館所蔵の資料を入手した後、アーカイブスの大学拡張委員会の資料の収集に入り、ヴァイス女史が主な担当となり、1985年10月11日付けの書簡でケンブリッジと同じように原資料を取得することができた。イギリスに留学した東大の宮坂広作教授は、アーカイブスに行って原資料の幾つかを求めた時のことを次のように書いている。

筆者がある資料を入手すべくイギリスの某大学のアーカイビストに会いに行ったところ、「Mr. Kagawa から膨大な資料のコピーを強要され、ほんとうならそんなことはできないのだが、彼の熱意に負けてひどい hard work をしてしまった。君が求めているのはその時と同じ資料だから、Mr. Kagawa にそうしてもらおうようにしてほしい」という対応を受けた。(宮坂広作『イギリス成人教育史の研究II』明石書店、1996年、56-57頁)

この話はオックスフォードのヴァイス女史と資料提供をめぐる話であるが、ここに書いてあるとおり大変な交渉であった。彼女は山積みされているオックスフォードの大学拡張関係の資料を整理し棚番号を付けている時にあたり、公開及び複写提供の基準がまだ定まっていなかったため、委員会議事録等を提供するのに躊躇されたのである。何度もやりとりがあり、結局、彼女が根負けして、鉛筆書きの棚番号の一覧を送付してくれたので、それに基づいて大量に原資料を入手することができた。ケンブリッジでもオックスフォードでもそうであるが、現在はこれらの資料を入手するのはきわめて困難である。個々の資料に付けられた棚番号がわからないと目的の資料に近づくことすらできないこと、個人情報が含まれていること、著作権の問題があること、それよりなによりも19世紀から20世紀初頭の資料は貴重本扱いとなり、現地で読むことが原則になっているからである。それらの制約を突破しても、複写の値段が高価で手が出しにくい状態になった。広島大学の図書館で聞いたところでは、3年ぐらい前から複写費は上昇して、著作権と年代によって異なるようになり、3枚コピーしてもらって5千円の請求が来るという。つくづく、ちょうどよい時に資料を入手したものであると思う。

オックスフォードでの難問を突破すれば、英米の外の大学や地方図書館のアーカイブスと資料のことでやりとりするのは簡単なことであった。また、他の文献資料に関して、伝記はロンドンのアンドルー・ジョンズ古書店、社会科学関係の文献はハマースミス店と契約をして組織的に購入する上得意のお客であるという自信があったので、ある時ハマースミスに、19世紀から20世紀前半の労働者教育に関するパンフレット現物が欲しいという相談を持ちかけた。お店は、いろんな組合に問い合わせさせて、ある労働組合が資料を適切な値で処分していいといっているが、どうするか、といい、'Adult Education Collection'という題目のもとにパンフレットのリストをつけて購入の有無を問うて来た。リストは部分的なものであったが、全体として信用できるものであるので、1978年12月12日に商談をまとめてくれた労苦に報いるため、言い値すなわち314.05ポンド(為替1ポンド390.80円)で購入した。

3. 「成人教育コレクション」の内容

現代の歴史研究者が原資料を取得するには、現物を現地で見て筆写するか、それらのコピーを入手するかである。書簡、議事録、メモランダム、企画書、名簿等のMSS(手稿)は特にこれに該当する。原資料にはこれら以外にも印刷された(printed)年報、広報資料、シラバス、メモランダム等もある。これらの原資料は小冊子の形(パンフレット)を取っていることが多い。印刷されたものとはいえ、パンフレットやチラシの類は散逸し易いもので現物で残っているのが少ない。その願いが叶ったのがこのコレクションである。

現物を受け取ったのは1979年1月頃で、すぐに検分して見たところ、貴重なパンフレットが詰まっていたので満足して閉じ、以後明けたり閉めたり、時々取り出して一部を読んだりしたものであった。定年後にやっと両大学から得た資料を研究に活用できるように整理を済ませて、最後に取り組んだのがこのコレクションの整理で、本格的に目を通し文献リストを作ることができた。途中で明けたり閉じたりしたために、最初に得た資料の一部が紛失していたりして正確な点数がどれくらいあったのかわからないが、現在所蔵しているのは457点であることがわかった。この457点はよく吟味されたものと思われ、労働組合の名前が特定できる資料は省いてあった。ハマースミスも名前を明かさなかったのでどのような労働組合が放出したのかわからないが、提供されたパンフレット類から判断すると、1907年から32年にかけてはケンブリッジ大学拡張に関心を持っている団体であること、労働者教育協会と全国労働カレッジ連盟に加盟している有力組合、全国的な同業組合を統括する組合本部、というような性格を持つ労働組合と推量される。

年代別で資料の分布を見ると、次のようになる。

1880年代 4点、1890年代 1点、1900年代 5点、1910年代 74点、
1920年代 55点、1930年代 63点、1940年-1945年8月 70点、
1945年10月-1949年代 55点、1950年代 52点、1960年代 26点、
1970-73年代 2点、刊行年不記載 50点

棚番号の付いているのは146点で、その多くはW.64の棚の資料であった。この棚は労働者教育の冊子114点があり、その他にRはラスキンカレッジ関係資料を示し21点、Eは教育法関係で2点、Tは労働組合会議関係で1点、Qは規約で1点、棚番号の付いていないのが311点であった。R., T., Q.の番号は、体系的付けられたものではなく、Wに含まれているものも多数あるし、Qの規則・規約に関する小冊子は13もある。また、棚番号は通常は年代順に付けていく場合が多いのに、このコレクションでは順不同である。そうしたことから、筆者所蔵のコレクションとして、主に資料の内容から区分を設け、新たに棚番号を付け直すこと整理し直した。それぞれの区分に収録されている資料の性格を示すと以下のようになる。

- W.1 労働者教育の在り方 (41点)
論文、報告書、講演録・講義概要、メモランダム、広報解説リーフレット
- W.2 労働者教育団体の運営 (115点)
論文、報告書、講演録・講義概要、メモランダム、広報リーフレット、集会プログラム、年報、規約・規則、議事録、指示書、手引書、書簡
- W.3 労働者教育の内容 (111点)
論文、報告書、講義録・講義概要、メモランダム、シラバス、便覧、講座案内・プログラム、便覧、受講ノート、単行本 (7点)
- W.4 大学拡張講座 (22点)
論文、年報、報告書、広報リーフレット、規則、単行本 (1点)
- W.5 雑誌 (83点)
Highway(75点), *New Epoch*(4点), *Today and Tomorrow*(1点), *Adult Education*(1点), *Bulletin of W.A.A.E.* (n.s., 2点)
- W.6 成人教育・社会運動、その他 (85点)
成人教育関係報告書・論文、社会主義運動関係論文、女性解放運動関係論文、労働組合・協同組合関係講演録、説教録、新聞切り抜き、書簡、単行本 (13点、そのうち伝記が6点)

4. 労働組合所蔵「成人教育コレクション」の資料的価値

労働組合が手放した「成人教育コレクション」の特性は、次のところに認められる。

第1は、労働者教育全体を網羅したのではなく、限定的に資料提供がなされていることである。先方はこちらの要望をよく理解して、所蔵の資料のなかから、要望者が関心のありそうなパンフレットを送付するように努力したと思われる。その場合、どの労働組合から放出されたのかが特定できないように意識的に除かれているようみえる。そのことは、棚番号 W.64/1 から始まって最後が W.64/158 であるが、途中で幾つか抜けていること、棚番号 R.16 では R.16/27 以前は含まれていないことからわかる。もっともタイプスクリプトの内部資料、書き込みのある校正資料等からある程度どの労働組合であるかを推察することは可能であるが、推量の域を出ない。

第2は、このコレクションからは、1900年から1960年代にかけての労働者教育の動向を総体的に把握するのは無理であるにしても、社会の動きと関連し、歴史的な曲がり角の時点における労働者団体の主張を読み取ることができる。また、講座等の詳しいシラバスや講義録、それに「学習の手引き」が含まれているので、それらを分析すれば、成人教育とは異なる労働者教育独自の視点を見ることができる。パンフレットの主力は労働者教育協会 (232点) と全国中央労働者カレッジ (80点) に関連したもので、全体の約3分の2を占めている。あまりお目に掛からないのに、共産党や各種社会主義者の団体や成人学校の資料も含まれている。以て、労働組合の教育上の関心がどこにあるかを知ることができる。

第3は、労働組内の行う労働者教育は、一般の成人教育や大学拡張とは別で独自の領域であるということが、このコレクションからうかがえる。一般の成人教育に関する資料は理念とか施設活用に関心はあるものの、プログラム等はほとんど含まれていない。大学拡張に関しては、1907-32年にかけてのケンブリッジ大学の拡張講座冊子 (プログラム、拡張講師リスト、規則集) が含まれているが、労働組合の関心は大学拡張講座の講師任用、テーマの設定の仕方、実際に参加するにサマースクールが参考にした資料に過ぎないように思える。

第4は、コレクションには、多くの貴重な資料も含まれている。3つほど紹介しておこう。

・ *Inaugural address delivered at the twenty-second annual Co-operative Congress, held at Glasgow, May 26, 27, & 28, 1890, by the Right Hon. The Earl of Rosebery.* Manchester: The Co-operative Union Limited, 1890. Pp. 15.

・ *A plea for a labour college for Scotland.* [Address by Mr. James D. MacDougall before about 500 delegates from Trade Unionists, Co-operative, and Socialist organizations in the Co-operative Hall, Clarence street, Glasgow, on Saturday, 12th February, 1916, at 3 p.m.] Pp. 15. (rare pamphlet)

・ Paul, Eden and Cedar. *Independet working class education: Thoughts and suggestions.* London: The Workers' Socialist Federation, 1918. Pp. 31. (scarce)

上記3点のうち下の2点には、労働組合が特別に封筒に入れて、'rare', 'scarce'と添え書きされていたものであった。労働者教育や労働運動に関心のある研究者ならば、どのような文脈で発表された文書であるかは理解できるに違いない。

労働者教育に関する資料は、労働者教育を提供している団体（過去に提供した団体の場合は、大学等の寄託先）に所蔵されている。たとえば、労働者カレッジの場合は、ロンドン労働者カレッジのミュニセントルームに過去の資料が一括して所蔵されている。大学拡張運動と労働者教育の関係では、ケンブリッジのシュアートハウスに所蔵されている BEMS 資料の中にあちこちに含まれているし、オックスフォードの大学アーカイブスの DES 資料やボードリン図書館の図書にも含まれている。大学所蔵の労働者教育の資料は、大学の関わりの観点から資料が集積されているので、ここで取り上げたようなコレクションにある資料の多くは含まれていない。この点からも労働者に学習を勧める労働組合の資料は、大学拡張運動を労働者の観点から見るときに不可欠であるといえよう。

原資料は棚番号で表記されるので、具体的に個々の資料の書誌を知ることができない。次号では、このコレクションの各資料に書誌を付けて公表したい。

香川 正弘 (かがわ・まさひろ)

1942年、広島県生まれ。広島大学大学院教育学研究科教育行政学専攻博士課程単位取得中途退学、1987年「イギリス大学拡張成立史研究」で教育学博士(広島大学)。上智大学名誉教授。